

Soviet anthropology in the institutional contexts :
Theories of Soviet anthropology and potentiality
of historism : Theories of Soviet anthropology and
contacts with Western anthropology

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 史郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001245

第 I 編

制度としてのソビエト民族学

ソビエト民族学の理論と西側人類学との対話

佐々木 史郎

国立民族学博物館

ソビエト民族学は社会主義国家ソ連で生まれ、独特の発達を遂げた人類学の1つの分野であり、理論であり、パラダイムである。ソ連の人類学者、民族学者たちは海外の研究者との交流が制限されていたために、全体的に閉鎖的な社会を形成していて、その実態が見えにくいというイメージを与えてきたが、実際には西側世界の人類学との交流も積極的に行ってきた。本稿ではイギリスの人類学者E・ゲルナーが主催した交流によって明らかにされたソビエト民族学の理論的な特徴について論じることとする。

日本では、ソビエト民族学とは教条主義的なマルクス主義理論（史的唯物論）を基礎としていて、モルガンの社会進化理論をそのまま現地社会に適用するようなイメージで捉えられることが多いが、その理論は意外と多様で、史的唯物論に対する考え方も柔軟である。その方法論の最大の特徴は歴史主義であり、それが歴史主義的な視点を捨てた西側の人類学とは決定的に異なる点であるが、ゲルナーによればともに、19世紀的な進化主義と決別することによって生まれたパラダイムである点で、平行関係にあるという。筆者は、発展史観のように社会史の理解を阻害するような要因はあるが、ソビエト民族学の歴史主義的視点に、現在の人類学を再生させるためのヒントが隠されているのではないかと考えている。

- | | |
|--------------------------|-----------------------------|
| 1 序論 | 4 E・ゲルナーのソビエト民族学評価とそれに対する反応 |
| 2 ソビエト民族学の理論的な基礎 | |
| 3 西側世界の人類学に対するソビエト民族学の対応 | 5 結論——ソビエト民族学が人類学になり得る貢献 |

*キーワード：ソビエト民族学，マルクス主義，史的唯物論，社会形態，歴史主義

1 序論

ソ連崩壊から既に長い年月が流れ、かつて「ソビエト民族学」（ロシア語ではsovetskaya etnografiyaだが、英語ではしばしばSoviet anthropologyと訳される）と呼ばれた人類学の一分野が存在したことも、人々の記憶の彼方に消えようとしている。冷戦の「敗者」とされた社会主義という国家体制の枠組みの中で形成された独特の人類学あるいは民族学に、ポスト冷戦時代を生きる現代の人類学者が学ぶべきものがあるのか、あるいはそれをレビューする価値があるのか、という疑問もわいてくるかもしれない。所詮は国家の思想統制の下に、教条主義的なマルクス・レーニン主義の教義（ドグ

マ)に縛られたモルガン流の古典的な進化主義を墨守するだけで、フィールドデータはともかく、理論的には何らみるべきものはないというイメージが日本の人類学者の間に蔓延していたことは否定できないだろう。

ソビエト民族学の理論は、すでに1950年代から80年代にかけて、日本でも紹介されてはいた。例えば、日本民族学会の機関誌『民族学研究』では1950年の14巻4号に西村朝日太郎の「ソビエト人類学界の近況」、1952年の16巻3/4号に香山陽坪の「最近のソ連民族誌学」、1966年の31巻3号に加藤九祚の「ソ連邦におけるシベリアの民族学的研究の現状」が掲載された(西村 1950; 香山 1952; 加藤 1966)。香山陽坪はその後S・P・トルストフ、M・G・レーヴィン、A・P・オクラードニコフ、S・A・アルチューノフの論文を訳出して、『民族学研究』に載せている(トルストフ 1959; レーヴィン 1960; オクラードニコフ 1960; アルチューノフ 1962)。また、松園万亀雄は東京都立大学社会人類学会の機関誌『社会人類学』の3巻3号(1962年)に「ソヴェト民族学における〈経済・文化型〉および〈歴史・民族誌的領域〉の概念」という論文を載せて、レーヴィンの「経済文化類型」と「歴史民族誌的領域」という一種の文化類型や文化領域に関する理論を紹介している(松園 1962)。人類学者ではないが、マルクス主義歴史学者の中島寿雄によって、Yu・V・ブロムレイ編集の『マルクス主義と人類社会の起源』が1974年に大月書店から翻訳、出版され(ブロムレイ 1974)、さらに1983年には、中島が中心となって、Yu・I・セミョーノフの『人類社会の形成』(*Kak vosniklo chelovechestvo*)も翻訳、出版された(セミョーノフ 1983)。

しかし、総じて、ソビエト民族学の理論は同時代の日本の人類学者の間ではほとんど知られず、さほどの影響を残さなかった。また、ソ連の人類学者や民族学者との交流や意見交換も、個人的な書簡の往復程度にとどまり、あまり活発ではなかった¹⁾。

日本ではマルクス主義が哲学、歴史学、経済学、社会学など人文・社会科学で強い影響を残した。人類学でも、特に経済人類学ではマルクス主義がその理論的な支柱の1つとされる。しかし、そこでもソビエト民族学の存在感はほとんどなかった。近年出版された人類学の理論を紹介する本でも、マルクス主義人類学が取り上げられてはいたが、旧ソ連の研究はアリバイ程度にしか触れられていなかった(小野沢 1984; 2006)。日本では、マルクス主義人類学の中ですら、ソビエト民族学は周辺に追いやられていたわけである。その最大の原因は、旧ソ連が国内のフィールドを閉鎖していて、日本の人類学者がソ連のフィールドでその理論を検証することができなかったことにあるのだが、もう1つ、日本国内の事情も関係していたと考えられる。すなわち、マルクス主義に立脚した人類社会史に関する理論的な議論が、哲学者、歴史学者、経済学者、社会学者に占められていて、人類学者が入り込む余地がなかったのである。そこでは、例えば「アジア的生産様式論」に関する議論などが活発に行われていたはずだが、そこにソビエト民族学の素養を持つ人類学者が参加した形跡は見あたらない。

それに対して、日本ではあまり知られていない事実だが、イギリスやアメリカの人類学者はこのソビエト民族学に幾度となく真剣に対話を求めた。それも冷戦下で敵対する陣営の学術情報を収集しようという政治的意図の下に行われたのではなく、かなり純粋に学術的な関心の下に行われている²⁾。対話を求めたのはイギリス、アメリカ側だけでなく、ソ連側も同様である。そのような対話、交流の動きには波はあったが、第2次世界大戦が終了して冷戦が始まってから一貫して通奏低音のように流れており、時折学界を主導する主要な人物が提唱して組織的な交流が行われている。比較的大がかりで組織だった交流としては1970年代後半にE・ゲルナー（Ernest Gellner）が主導したイギリス、フランス、アメリカの主要な西側陣営の人類学者とソ連の人類学者との交流（1976年7月17～25日にオーストリアのブルク・ヴァルテンシュタインで行われ、西側から10人、ソ連側から8人の人類学者が参加した）が挙げられるが、それ以前からも交流は頻繁に持たれていた。例えば、各国の人類学、民族学の学会が参加する国際人類学民族学会議にはソ連からも少なからず参加していたが、1964年にはそれがモスクワで行われ、東西の人類学者、民族学者が交流する場が設けられた。その会議はその後1968年に東京、1973年にシカゴで行われ、その時もソ連からYu・ブロムレイ（Yurian Vladimirovich Bromlei）をはじめ、有力なソビエト民族学者が参加してきた。

ただし、アメリカでもイギリスでも、ソビエト民族学の動向に関心を持つのは、人類学の主流を行く研究者ではなく、どちらかというと周辺的な研究者であった。戦後のアメリカ人類学で一時大きな影響力を持ったL・ホワイト（Leslie Alvin White）³⁾、やJ・スチュアード（Julian Haynes Steward）⁴⁾が提唱した新進化主義人類学がマルクス主義に関心を示したことは有名であるが、ホワイトやスチュアードがソビエト民族学と積極的に対話を持とうとしたわけではない。1950年代から70年代にかけての時代にソビエト民族学に強い関心を示したのは、やはりソ連国内の諸民族の社会や文化を研究対象とする人類学者だった。例えば、中央アジアのチュルク、モンゴル系の遊牧民の社会組織の研究で有名なL・クレイダー（Lawrence Krader, 1970年代当時はベルリン自由大学教授）、アメリカの文化人類学者ではソ連国内の諸民族の文化変化や社会動向に注目したA・ヴキニッチ（Alexander Vucinich）とS・ダン（Stephan Dunn）、イギリスの社会人類学者ではロシアの宗教研究を行ったT・ドラガゼ（Tamara Dragadze）と社会人類学者として初めて集団農場下のブリヤートの現地調査を行ったC・ハンフリー（Caroline Humphrey）などの名を挙げることができる（Krader 1959; Vucinich 1960; Dunn 1962; Dragadze 1980; Humphrey 1983, 1984）。ことにクレイダーは1950年代までの、ハンフリーは1970年代～80年代のロシア、ソ連における人類学の動向と理論的な争点をそれぞれ手際よくまとめた論文を発表している（Krader 1959; Humphrey 1984）。ゲルナーが主導した交流もこのような研究の流れの中にあり、1975年に『カレント・アンソロポジー』（*Current anthropology*）誌に転載された論文

(Gellner 1975) にはアメリカ、イギリス、ソ連から50人もの人類学者や哲学者が論評をよせたが、その中で的確な批判、指摘をしたのはクレイダー、ダン、ドラガゼらであった。

彼らの論考から読みとれるのは、ヨーロッパやアメリカでは冷戦時代からすでに人類学者がスラブ=ユーラシア研究の中で一定の存在感を持つと同時に、スラブ=ユーラシア地域を研究対象とする人類学者が人類学全体の中で存在感を持っていたという点である。それは日本における状況と全く対照的である。日本でもソ連崩壊後のポスト社会主義時代にいたって、ようやくスラブ=ユーラシア地域研究において人類学が存在感を示すことができるようになったが、冷戦時代には全く存在感がなかった。そして日本の人類学では、いまだにスラブ=ユーラシア地域をフィールドとする人類学的研究の認知度が低い。

本稿は、ソ連崩壊によって学術的な基盤と存在意義を失ったかのように見える旧ソ連時代のソビエト民族学の理論的、方法論的特徴を、冷戦時代における西側陣営の人類学者との対話の中から、見いだそうとする試みである。確かに、ソ連の後継国家である現在のロシア連邦の学術動向においても、ソビエト民族学を標榜する人類学者、民族学者はほとんどいない。しかし、現在のロシアの人類学や民族学の基底にはいまだにソビエト民族学の基本構造が残されている。マルクス主義的史的唯物論をそのまま信じている研究者はいないが、ソビエト民族学が培ってきた、環境に適応しつつ変化していく人類社会の発展過程を追跡する歴史主義的な研究方法や、そのような方法によって考察されてきたエトノス論、民族起源論、民族過程論、文化変化論、さらにソビエト民族学の方法論の基礎中の基礎である、個々の民族社会、民族文化の詳細な民族誌的記述のための方法論などは、今なおロシアの人類学者や民族学者に共有されている。したがって、現在のロシアの人類学や民族学の動向を知る上で、ソビエト民族学の理論的、方法論的特徴を明らかにすることは不可欠である。

また、かつて、拙論でも指摘したように、現在のロシアの民族的状況、すなわち、政府や行政が住民を民族という単位で分類、区分するための方法や、人々の民族的な帰属意識やアイデンティティに、ソビエト民族学の研究成果が強い影響を与えてきた(佐々木 2001: 56-69)。人々の民族意識は、事実上ソビエト民族学が示した民族分類に拘束されているといっても過言ではない。したがって、現在の民族的状況を理解するためにも、ソビエト民族学の特徴を明らかにすることは必要不可欠なのである。

しかし、ソビエト民族学の理論的、方法論的特徴といっても、それらは70年にも及ぶソ連時代を通じて不変だったわけでも、一枚岩だったわけでもない。建前上はマルクス・レーニン主義の主要な思考方法である史的唯物論(唯物史観)を基礎にした人類文化史、人類社会史の研究がその主要な任務であったが、その研究対象から分析方法に至るまで実に様々であり、しかも、それらは政治的指導者の交替や世界的な学界の動向などに影響されて大きく変化してきた。個々の時代の理論を代表するような著作は多数出版され

ているが、それを1つ1つ当たっても70年に及ぶソビエト民族学の理論の動向はつかめない。何よりもそのような理論的な著作は1つ1つが大きすぎて、また、扱う事象が多すぎて、それらを通じて全体像を把握するのはかえって難しい。それよりも、全く異なる学風を持つ研究者グループと遭遇したときに見せる反応にその特徴が的確に現れる。とりわけ、冷戦時代には政治的な問題も関係して水と油、あるいは犬猿の仲と思われたイギリス、アメリカの機能主義的（構造機能主義的）、あるいは構造主義的な社会人類学や文化人類学との対話が行われたとき、ソビエト民族学の特徴が明確に見えてくる。

本稿では1970年代後半にE・ゲルナーが主導した西側陣営の人類学との対話を通して、ソビエト民族学の理論の特徴をあぶり出すことを目的としている。上述のように、ソビエト民族学とイギリスやアメリカの人類学との接触、対話、論争はすでに1950年代から見られ、さらにさかのぼれば、19世紀にロシアに民族学という分野が導入された当時から交流はあった。その中でも特に1970年代のゲルナーとの交流を中心に据えたのは、この時代にソビエト民族学が1つのピークを迎えており、理論的な研究が充実していたことと、ソ連、英米双方が互いの人類学、民族学に関する知識や情報を蓄積してきていて、無知や誤解による不毛な中傷合戦に陥る危険性が小さく、両者の対話が建設的な方向で行われたからである⁵⁾。

本稿ではまず、ソビエト民族学の理論的な基礎とそこで扱われた理論的諸問題について概略を紹介した後、ソビエト民族学の西側人類学に対する対応と批判を概観し、続いてゲルナーの対話を分析しつつソビエト民族学の特徴をあぶり出したい。

2 ソビエト民族学の理論的な基礎

ソビエト民族学の哲学的、思想的な基礎がマルクス主義哲学の史的唯物論であることはいうまでもない。しかし、ソビエト民族学ではそこにL・H・モルガン（Lewis Henry Morgan）の進化主義人類学と、彼の主著である『古代社会』（1877 *Ancient Society*）に啓発されてF・エンゲルス（Friedrich Engels）がまとめ上げた社会進化論（『家族・私有財産・国家の起源』1884 *Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staats*）が絡むことから、その理論的な基礎は複雑な様相を呈することになる。

ソビエト民族学が初めからモルガンとエンゲルスの理論を基礎にして成立したわけではない。そもそもロシアの民族学は、帝政時代に帝国の支配下に置かれた各地の住民を把握するために、地理学の一分野として生まれ、発展してきた。その伝統は革命後も保たれ、ソ連における民族学の祖といわれるL・Ya・シュテルンベルク（Lev Yakovlevich Shternberg）やV・G・ボゴラス（Vladimir Germanovich Bogoraz）らがレニングラード大学に民族学の講座を設置しようとしたときにも地理学科の一分野

として設置された。その後独立した学科に昇格し、後に「レニングラード学派」と呼ばれる一群の民族学者を輩出することになるが⁶⁾、民族学を再構築するに当たり、シュテルンベルクらが重視したのは、フィールドワークと現地言語の習得といった調査方法に関する実践的な側面であって、分析方法に関してはロシア革命以前のヨーロッパにおける人類学、民族学の潮流を受け継いでいた。モルガン流の社会進化論も、進化主義的な考え方の1つに過ぎなかったのである。

モルガンの未開 (savagery)、野蛮 (barbarism)、文明 (civilization) という3段階の社会進化図式 (未開と野蛮はさらに3段階ずつの下位区分があったことから全部で7段階となる) は、必ずしもマルクス、エンゲルスが提唱した未開社会、奴隷制社会、封建制社会、資本主義社会、社会主義社会という5段階の発展図式と整合するわけではない。しかし、エンゲルスが彼の親族理論と社会進化図式を支持し、モルガンを伝説化したことで、1930年代以降のソビエト民族学の中で確固たる地位を占めていくことになったようである (Tolstoy 1952: 10)。それはちょうどY・スレスキン (Yuri Slezkina) がいう「ソビエト民族学の崩壊」の時代に当たる (Slezkina 1991)。

この時代はスターリンの主導による歴史科学 (人類社会あるいは特定の集団の過去の復元を主要な研究対象と規定された分野の総称で、歴史学、考古学、民族学などが含まれる) 全体の再編の時代にあり、民族学はその中で特に人類社会の発展段階の最初期に当たる「未開社会」に関するデータを集めることを任務とする分野と規定された。その未開社会を分析する方法論として、エンゲルスも認めたモルガンの理論が採用されたのである。そしてその過程で、ソビエト民族学の初期の創始者たちであったシュテルンベルクやボゴラスすらも批判の対象とされ (シュテルンベルクは1927年に、ボゴラスは1936年にはこの世を去っていたが)、レニングラード学派はその力を失い、民族学自体が歴史学の下僕の地位に甘んじるようになった。

スターリン時代の強権的な学術分野への介入は第2次世界大戦前後のソビエト民族学を混乱に陥れたが、スターリン自らが、民族学を二義的な地位に落としたマール学派⁷⁾と決別し、さらにスターリン自身が世を去ることによって収拾に向かう。その際にモルガンに対する評価も、肯定的ではあるが、戦前とは異なるものになったという (Tolstoy 1952: 12)。例えば、P・トルストイ (P. Tolstoy) によれば、Yu・P・ペトロヴァ＝アヴェルキエヴァ (Yuriya Petrovna Petrova-Averkieva)⁸⁾ は新進化主義を提唱したL・ホワイトやB・J・メグガース (Betty. J. Meggers)⁹⁾ をモルガンの後継者として評価し、M・G・レーヴィン (M. G. Levin)¹⁰⁾ は、モルガンが偉大なのは「唯物論」的な思考を持っていた点と、生産の発展段階を基礎にして時代区分をした点にあると主張したという。つまり、戦前と戦後のソビエト民族学におけるモルガンの評価の相違とは、「戦前ではモルガンはその進化主義の体系、すなわち、マトーリンがより明確にマルクスのであると認めた歴史的弁証法のために崇敬されたのに対して、戦後の新しい見

方では、彼の体系は背景におかれ、彼がものごとを「唯物論的」に理解していたことから、彼を本質的にマルクスの小さなレプリカ、そしてマルクス同様の権威を見て取る」(Tolstoy 1952: 13) という点にあったようである。

このような戦争を挟んだ時代間におけるモルガンに対する態度の変化について、P・トルストイは、ソビエト民族学におけるモルガン進化主義の権威の低下を見る。モルガンはもはや理論的な支柱ではなく、マルクスやエンゲルス、あるいはレーニンやスターリンがもっと高度に行った方法を用いた研究者の1人にすぎなくなり、彼の進化主義もソビエト民族学の文化概念の一部にすぎなくなったというのである(Tolstoy 1952: 15)。

このような事情が関係してか、1950年代から60年代にかけてソ連では人類社会進化史、とりわけ「未開社会」の歴史の研究で新しい動きが見られた。それは、自然人類学者のYa・Ya・ロギンスキー(Ya. Ya. Roginskii)が初めて提唱し、哲学者のYu・I・セミョーノフ(Yurii I. Semenov)が体系化した「2段階飛躍説」と呼ばれる仮説である。それによれば、アウストラロピテクスからホモ・エレクトゥスに進化する段階と旧人(ネアンデルタール)と新人(ホモ・サピエンス・サピエンス)とが交替する時代に人類社会に大きな飛躍が見られたとするものである。前者の飛躍は動物的な「乱婚」状態からより特定の集団内で限定的に行われる内婚的な「集団婚」への変化によって、より人間的な社会集団が形成されるようになったことを指し、後者は内婚的「集団婚」から、外婚的「集団婚」への変化によって氏族社会が出現したことを指す(セミョーノフ 1983)。

この仮説はマルクス主義的な社会進化論(社会発展論)の中では最も初期の段階(未開社会でもその成立期に当たる部分)を扱ったものだが、そこにはモルガンの進化主義に対する教条主義的な固執は見られない。その代わりに1950年代、60年代の西側世界の研究も含めた自然人類学、先史考古学、民族学、言語学などの成果が広く取り入れられている。このような研究や仮説に対しては、ソ連でも自然人類学者や民族学者の間から旧世代を中心に強い反発が見られたが、戦後世代に属する研究者からは比較的好意的に受け止められた。例えば、P・トルストイが挙げたペトロヴァ＝アヴェルキエヴァやレーヴィン、さらにはS・P・トルストフ(S. P. Tolstov)の跡を継いで民族学研究所所長となったYu・V・ブロムレイなどは、ロギンスキー、セミョーノフらの仮説を支持している。

ただし、この仮説には当時ソ連でメンデルの遺伝学に対抗して打ち出された「獲得形質は遺伝する」、あるいは「人類は労働によって形成された」というような考え方を肯定するような自然人類学の理論に足がかりをおいている部分もあるために、現代の視点で見れば理論的に妥当性を欠くところもある。また、何よりも、この仮説には裏付けとなる先史考古学や形質人類学による実証データが乏しいために、机上の空論であることは否めない。しかし、現代でも認められているホモ・ハビリスの段階からホモ・エレクトゥスの段階での道具製作技術の飛躍的な発展と、旧人の文化(中期旧石器文化)と新

人の文化（後期旧石器文化）との間に見られる歴然とした違い、とくにその多様性の幅と適応する自然環境の幅の大きさの相違に着目すると、この仮説における人類社会の飛躍点が見事に一致する。つまり、論理操作ながら、現代の自然人類学の流れを先取りした部分も有しているわけである。

モルガンの進化図式、またそれと連動した教条主義的なエンゲルスの社会進化図式の呪縛から解かれたことによってソビエト民族学の理論的な研究は一定の多様性を見せるようになる。研究対象を未開社会、あるいはそれを想起させるようなモルガンの「未開」や「野蛮」の段階にあるとされた現代の非ヨーロッパ地域の諸民族社会の研究に限定されることはなくなり、奴隷制度や封建制度をもつ「文明」段階の社会をも取り扱うようになった。それらはしばしば「前資本主義社会」（英語では pre-capitalist society、ロシア語では dokapitalisticheskoe obshchestvo）と呼ばれるが、そのような社会の歴史、つまり、その成立から崩壊、そして次の段階への発展（つまり資本主義社会への発展、あるいはそれをとばして社会主義社会への発展）の過程を分析することもソビエト民族学の研究の射程の中に入るようになったのである。

また、研究対象としての「民族」の問題にも重大な関心が払われるようになった。「多民族国家ソ連」にとって、民族の定義、認識、認定の問題は理論的にも実践的にも重要な民族学的課題だった。これに関連して発生したのが「エトノス論」、「民族起源論」、「民族過程論」とよばれる分野である。とりわけ後二者はソビエト民族学の歴史主義的な側面を如実に表す分野である。エトノス (ethnos) とは人間の社会生活あるいは文化における民族的な属性の本源であり、民族を民族たらしめている本質であり¹¹⁾、また民族そのものを意味することもある。エトノス論とはこのエトノスという概念の定義と属性、そしてそれが人類社会でどのように位置づけられ、作用するのかを論じる。そしてその研究から派生する重要なテーマとして、新しいエトノスが形成される過程である「民族起源論 (ethnogenesis, etnogenez)」と、すでに形成されたエトノスが内的、外的要因によって変化していく過程を追う「民族過程論 (ethnic processes, etnicheskie protsessy)」という分野がある (Bromlei 1979: 17-20)。

しかし、それには西側人類学にはない長所と西側人類学も共有しうる短所とがある。

まず長所とは、これらの分野が学際的な方法論を新たに開拓する契機となりうる点とその歴史主義的な観点によって現在の状況を相対化することが可能になる点である。民族起源論、民族過程論とは事実上はソ連時代に政府によって認定されていた民族集団の生成過程、変遷過程を突き止めようとする研究で、その意味では政治に強く拘束されている。しかし、だからといってこのような研究分野がすべて無意味だったわけではない。すでにソ連政府が認定する以前から「民族」としての実体を持った集団を形成していた人々も多数いたわけで、彼らの民族生成過程は同じ政治の問題でもソ連の政治とは異なるレベルであり、それ自体が研究対象となる価値を有している。そしてそれを追求する

ためには、民族学や社会／文化人類学だけでなく、歴史学、歴史地理学、考古学といった歴史科学とともに、言語学（特に歴史言語学）やフォークロアのような人文諸科学、政治学や社会学のような社会科学、さらには形質人類学や古地理学、古気候学のような自然科学の研究成果までも援用するような、学際的な研究方法の開拓が必要とされる。つまり、ある民族の起源（ethnogenesis）を探るということは、国家レベルの学際的な学術組織を組む必要があり、それがまた、個々の学術分野に新しい刺激をもたらして発展を促すことになる。

ソ連の場合も民族起源論を主導した民族学のみならず、上記に列挙した分野が「民族起源論」の研究に関係することで一定の刺激が得られ、研究の進展が見られた分野があったことは否定できない。ソ連には100を超す民族があり、ソ連科学アカデミーが特定の民族の研究を、組織を挙げて推進することはなかったが、ソ連内の民族共和国（連邦構成共和国）や自治共和国、あるいは東欧諸国などではその国を構成する主要民族の起源を求めるために、政府が学術組織を支援することがあった¹²⁾。

ソ連の民族起源論あるいは民族過程論の最大の欠点は、実証的な論証に使用する資料の恣意的な偏向である。ソ連の場合、研究対象となる民族という枠組み、あるいは集団そのものの設定が恣意的、政治的であることが多く、そのようなものを真剣に学際的に研究する価値があるのかという疑問も当然上がる。しかし、実際に存在し、自己主張をする民族という枠組みや集団（エトノスと呼ばれる理念的な概念ではない）はそもそも政治的産物なのであり、ソ連の政治力学が働く以前から存在していても、どこかで別の種類の政治力学が働いている。それを探ることも民族起源論の一部であり、それ自体には研究の価値があることから、研究対象の設定自体が政治的であるということだけではさほど大きな欠陥とはいえない。それよりも、その民族の成立過程やその後の変遷過程を追う際に使用される資料の選択と記述の方向性に政治的判断が介入してくる点が、ソ連時代の民族起源論や民族過程論の最大の問題点なのである。

例えば、筆者が専門とするアムール川下流域の場合、現在のナーナイ、ウリチ、ウデヘなどの先住諸民族の形成過程には、この地域を実効支配した中国の諸王朝の政治体制と経済体制、そしてそれにとまってこの地域に流入してきた漢民族や満洲民族、あるいはその文化が決定的な影響を及ぼしていた。それを実証するような史料や資料も存在する。中国側には、清の時代のこの地域の支配に関する1次資料である檔案類（役所の公文書）が大量に残されており（瀋陽の遼寧省檔案館に保存されている三姓副都統衙門檔案や北京の第一檔案館に保存されている寧古塔副都統衙門檔案など）、19世紀中期まで、アムール川流域が完全に清朝の直接の支配下にあったことを実証できる。また、ナーナイやウリチらの間にもそれを物語るような物的証拠として、清朝政府から下賜された絹織物の衣装や断片、さらには清朝の官位を表す帽子や帽子飾りなどが残されている。

しかし、ソ連時代にはそのような資料の存在は無視された。中国の檔案類は1980年

代になって研究が進んだことから、ソ連時代にはロシアの研究者には使えなかったが、現地の人々の間に残る資料に関しては、表面的な中国文化の影響ということで片づけられていた。というのは、1858年のアイグン条約以前に清がアムール川流域を完全に支配下においていたという事実がソ連にとって都合が悪かったからである。言い換えれば、帝政時代以来、ロシアもソ連もアムール川流域やサハリンの領有の正当性を「無主地先占論」に依拠していたために、清朝がそこを実効支配していたことが実証されてしまうと、帝政ロシアが中国からその地を侵略して奪い取ったということになってしまうからである。

また、漢文、満洲語、モンゴル語、朝鮮語、日本語、チベット語、アラビア語などのアジアの諸言語で書かれた資料を読み解くものが、「東洋学者」と呼ばれる文書を読み解くことを専門とする研究者に限定されていたことも、民族起源論や民族過程論の研究の可能性を制約することになった。人類学者、民族学者自身が新しい異質の資料を掘り出し、自らその資料を批判、検証することができないからである。異質の資料から見いだされるデータは、従来の文化像や民族像、歴史像を根底から覆す可能性も秘めている。筆者も漢文や満洲語、日本語で書かれた資料を、ロシア語その他の欧米の言語で書かれた民族誌と比較対照することで、アムール川下流域の先住諸民族の社会や文化に対するイメージを根本的に変えることになった。しかし、ロシア語あるいはせいぜいヨーロッパの言語で書かれた史料しか使わず、非ヨーロッパ系言語で書かれた史料でもロシア出身の東洋学者の解釈に依拠しなければならないようでは、視野を広げることはできず、分析のための視点も多様化できない。その結果得られるのは結局ロシア側、あるいはヨーロッパ世界から見た民族起源論や民族過程論である。しかし、それでは歴史主義的方法論としては不完全である。歴史的事実は多面的に、多方向から研究することによって完全な姿を表すのであり、それによって初めて関係する人々がその歴史的事実を共有できるようになる。それは民族起源論や民族過程論でも同じである¹³⁾。

3 西側世界の人類学に対するソビエト民族学の対応

ソ連時代、情報統制のために研究者が使うことができる西側世界の情報や文献は限られていた。ことにソ連の国家イデオロギーを痛烈に批判したり、反体制運動を刺激したりするようなものは公式には接することができないことになっていた。しかし、それでもソ連の民族学者たちは西側の研究にも大きな関心を持っており、できる限りの範囲で接する機会を得ていた。西側世界の人類学と正面から接することができる研究者は限られてはいたが（それは語学の面だけでなく、イデオロギー的にも）、彼らの西側人類学に対する批判は必ずしも独善的、イデオロギー的、あるいはドグマ的ではない。

ソ連科学アカデミーの民族学研究所の2代目の所長となったYu・V・ブロムレイは

ソビエト民族学と西側世界の文化人類学、社会人類学とを比較するような論集をいくつか編集している。その中には『海外の民族学研究——批判的論集』（1973年、モスクワ：ナウカ出版）、『海外の民族学の諸概念——批判的試論』（1976年、モスクワ：ナウカ出版）、『海外の民族学』（1979年、モスクワ：ナウカ出版）などがあるが（Bromlei et al. 1973; Bromlei, Grigulevich, and Puchkov 1976; Bromlei, Grigulevich, and Rikman 1979）、いずれも西側世界の文化人類学や社会人類学を十把一絡げにして「帝国主義的」な「ブルジョワ民族学」としてイデオロギー的に排斥するのではなく、その多様な姿を1つ1つ丁寧に解説し、ソビエト民族学との比較を行っている（当然後者を擁護しているが）。例えば、『海外の民族学の諸概念——批判的試論』では、社会人類学に対する批判論文の他、文化伝播主義、アメリカの文化領域論、フランスのマルセル・モースの社会学、ネットワーク理論、ウィットフォーゲルの灌漑農耕論、北欧の人類学、西欧人類学によるアフリカ研究が取り上げられている。また、『海外の民族学』では編者ブロムレイの巻頭論文に続いて、アメリカの心理人類学、L・ホワイトの新進化主義、イギリスの構造主義（構造機能主義）人類学、レヴィ＝ストロースの構造主義、ドイツの人類学、北欧の人類学、イギリスにおけるスコットランドとウェールズの問題、ルーマニアの民族学、アメリカ先住民研究、エスキモー研究、そしてオランダ構造主義人類学などが取り上げられている。

ソビエト民族学の理論的指導者でもあったブロムレイは比較的バランス感覚に優れていたようで、『海外の民族学』で自ら著した巻頭論文「文化＝社会人類学と民族学の研究対象——英米の人類学者とソ連の民族学者の解釈において（比較分析の試み）」（Bromlei 1979）では、イギリス、アメリカ流の社会人類学とソビエト民族学の研究対象の特徴をバランスよく説明している。これは西側世界の人類学に対する批判論文というよりも、解説あるいは啓蒙論文といった方がよいくらいである。

これらの論文の中で、イギリス、アメリカが主導する社会人類学あるいは文化人類学の動向を批判的に解説したものとして注目すべきものに、『海外の民族学の諸概念——批判的試論』の巻頭論文として掲載されたI・R・グリグリエヴィチ（I. R. Grigulevich）の「社会人類学に未来はあるか」（同じ著者の同様のタイトルの論文が『ソビエト民族学』1975年2号にある）がある。そのタイトルは挑発的であるが、これは教条主義的なマルクス主義イデオロギーに立脚して批判するような内容ではなく、1960、70年代に見られた社会人類学の内部からわき上がってきた自己批判的な動向に着目し、そこからイギリス・アメリカの社会人類学が有する植民地主義的あるいは帝国主義的な性格を暴き出そうとするものである（Grigulevich 1976）。グリグリエヴィチが引用するのはC・レヴィ＝ストロースの他、カレント・アンソロポロジー誌に掲載されたキャサリン・ゴフ（K. Gough）、D・J・ジョーンズ（D. J. Jones）、ダイアン・ルイス（D. Lewis）、J・G・ヨルゲンセン（J. G. Jorgensen）らの論文である。これらは

いずれも人類学と植民地あるいは植民地主義との関連を指摘し、それから解放された、フィールドと人類学者との新しい関係を模索するものであった。

彼はまず人類学そのものの発生が帝国主義的であったとする西側世界の人類学者たちの記述を引用する¹⁴⁾。例えばレヴィ＝ストロースの「人類学とは人類の大部分が他者にへつらっていた時代の産物であり・・・、人類学はこの暴力の時代の娘なのである」(Levi-Strauss 1966: 126)という表現や、キャサリン・ゴフの「人類学は西欧帝国主義の申し子である。その根は啓蒙時代の人文主義的なものの見方にあるが、1890年代から1900年代にかけての時代に大学の一分野として、あるいは近代科学として独特の役割を担うことになった。この時代は西欧諸国が、工業時代以前の段階にあった非西欧諸国をその政治的経済的支配下に置くために、最後の力を振り絞っていた時代である」(Gough 1968: 403)といった言い回しをつかって、その出自を西欧の帝国主義に求める(Grigulevich 1976: 12-13)。

そして、ルイス、ヨルゲンセン、R・L・ビールズ(R. L. Beals)らの論文を引用しながら、社会人類学がどのような方向に向かおうとしているのかを論ずる。特に、ダイアン・ルイスの「人類学と植民地主義(Anthropology and Colonialism)」(Lewis 1973)という論文はグリグリエヴィチの論文の中で重要な位置を占めている。ルイスは、社会人類学の出自が帝国主義や植民地主義と密接に結びつき、人類学者自身が特権的な立場から被調査社会を調査研究してきたことから、その理論と方法も植民地主義的であったと自省する。さらに、彼女は人類学者の「よそ者(outsider)」の視点から物事を捉える「客観主義(objectivism)」にも批判のメスを入れ、より多角的な、広い視野を持つ人類学への転換を主張する。そして、西欧の人類学者の外部からの視点の重要性も認識しながらも、かつて調査される立場にあった第3世界の「地元の人類学者(native anthropologists)」と同様の目線で彼らの社会を捉え、そこに現存する諸問題に内部から取り組む「アクティヴィスト人類学(Activist anthropology)」を提唱する(Lewis 1973: 589; Grigulevich 1976: 21)。

しかし、グリグリエヴィチ自身は変わろうとする社会人類学の方向性については直接論評していない。最後にレヴィ＝ストロースの「人類学は、新しい外観をまもって生まれ変わるために1度自らを滅することによって、変化する世界で生き残ることができるだろう」(Levi-Strauss 1966: 126)という言葉を用い、ルイスのいうアクティヴィスト人類学がその生まれ変わりを可能にするのかどうかという疑問を投げかけるだけである。そして、結論としては、人類学者は資本主義諸国、社会主義諸国、第3世界諸国といった出身国家にかかわらず、人類学の帝国主義や新旧の植民地主義からの解放と発展のために協力すべきであるという、優等生的なもので終わっている(Grigulevich 1976: 25)。

すでに指摘したように、この論評の特徴はイギリス、アメリカの社会人類学が有する

帝国主義的、植民地主義的な性格を直接批判するものではなく、内部の自省的な動向を捉えて紹介している点にある。西欧やアメリカで社会人類学者自身から自省的な論文が多数書かれるようになった1960, 70年代とは、アフリカ諸国が次々と独立し、戦後すぐに独立したアジア諸国や19世紀には独立を果たしていた中南米諸国を含めて、多くの発展途上国が植民地主義からの解放を目指して、社会主義的な政策を採用した時代であった。当時ソ連はそのような政治動向を戦略的に利用し（または扇動して）、冷戦時代に自らの勢力を発展途上国に広げようとした。

それと同時にこの時代はまた、西側世界の人類学者の主要なフィールドであったこれらの国々からも人類学者が現れ、欧米流の人類学の方法論を援用しつつ自分たちの文化を研究し、見つめ直すことがさかんになった時代でもあった。彼らの多くは「外からの目」で常に自分たちを睥睨するように見る欧米の人類学者たちの調査や研究に強い不満と反発を示し始めていた。そのような流れの中で、社会人類学でもその帝国主義的、植民地主義的な性格を見直すようになったのである。この時代の潮流は1980年代に興隆するポストモダニズム批判やオリエンタリズム批判につながっていき、1990年代には日本の人類学も巻き込んでいく。

1960, 70年代の社会人類学や文化人類学のこのような潮流は、表面的にはソ連あるいはソビエト民族学にとっては好ましい状況ではあった。当時の「地元の人類学者」や調査される側の人々の批判の矛先は、あくまでも西欧やアメリカ、そしてそれに追従する他の先進諸国の人類学¹⁵⁾に向けられており、ソビエト民族学に向けられたものは管見の限りほとんどない。それは、批判する人々の間にソ連の民族学者が入ったことがなかったからでもあるが、また、解放思想としての社会主義に対する幻想が生きていたことも関係していたのだろう。

しかし、1976年の時点ですでにこのような動向がソ連で紹介されていたにもかかわらず、ルイスらの危機意識はソビエト民族学には共有されなかった。著者のグリグリエヴィチの書きぶりでは、ソビエト民族学はこのような動向を対岸の火事のように見ていたようである。ソ連には民族問題は存在しないという政府の公式見解は、ソビエト民族学の調査方法や倫理の問題を隠蔽したが、1991年のソ連崩壊時に3代目の民族学研究所長（現研究所長）チシュコフ（V. A. Chishkov）が行ったソビエト民族学に対する自己批判でも、そこに帝国主義的、植民地主義的な性格があったかどうかという議論はなされなかった（Tichkov 1992）。結局人類学・民族学が有する本源的な性格にまで踏み込んだ議論はソ連時代には行われなかったのである。あるいは、ソビエト民族学の主要なフィールドであった中央アジアやシベリアは、帝政ロシアにとっては植民地であったが、ソ連にとってはもはや固有の領土あるいは連邦を構成するパートナーであって、建前上は植民地ではありえなかったためかもしれない。

しかし、例えばソビエト民族学のシベリア研究は、明らかにD・ルイスのいう「よそ

者」の視点による「客観主義的」な研究であった。

ソビエト民族学はいち早く被調査対象民族出身の人類学者や民族学者を育成した。そのような研究者は全シベリア、極東地域から現れたが、例えば、極東地域ではナーナイ出身のN・B・キレ (Nikolai Batunovich Kile)、ニヴフ出身のL・オタイナ (Lyudmira Otaina) やCh・M・タクサミ (Chuner Mikhailovich Taksami)、エヴェン出身のU・G・ポポヴァ (U. G. Popova) 等を挙げることができる。タクサミはシベリア先住民出身ではじめて歴史科学博士となり、ソ連科学アカデミー民族学研究所レニングラード支部のシベリア部長となり、最後はロシア科学アカデミー人類学民族学博物館 (ソ連時代の民族学研究所レニングラード支部がソ連崩壊後モスクワから独立した) の館長にまで昇りつめた。

しかし、ソビエト民族学の場合、シベリア先住民出身の民族学者が中 (insider) からの視点で自民族の文化を描けるか、というところでもなかった。ソビエト民族学は1つの学術分野として方法論、理論ともに確立されており、被調査対象民族の出身者であるかないかにかかわらず、必要不可欠とされる項目を調査し、一定の範囲の問題を、定められた理論を使って分析することが求められた。しかも、民族学者となるものは一度自分の出身社会からは隔絶され、支配者である多数派民族 (つまりロシア人) の価値観と視点、さらにはその中でも知識人の価値観と視点を共有することが求められた。つまり、自分の故郷で調査しても、民族学者として調査する限り、外の人間として調査し、報告書や論文を書かざるをえなかったのである。タクサミは出身のニヴフ文化についての多数の論考を残したが、ソ連時代のもは規格化された形式と内容のものが多い。タクサミがニヴフとして内部の目をもってニヴフ文化を語るようになるのはソ連崩壊後である (Taksami 2004; 2005)。

ソ連崩壊後、日本や欧米など西側世界出身の人類学者や民族学者にもシベリアや極東ロシアのフィールドが開放された。そこで我々が目にしたのは、ソビエト民族学の言説を再生産する先住民たちの姿であった。すなわち、彼らはソビエト民族学の民族誌やモノグラフに書かれているとおりに自分たちの文化を披露しようと必死に努力していたのである (それは伝統工芸や民族アンサンブルによく表れた)。ソビエト民族学は、K・ゴフやD・ルイスが指摘したような植民地政策に意識、無意識にかかわらず荷担してしまうという状態で留まっていたのではなく、被調査対象者の意識を拘束するレベルにまで達していたのである。それまでソビエト民族学では顧みられることがなかった事実や資料を掘り出し、先住民自身がそれらを自分たちの文化の一部であることをみとめて、博物館や資料館の展示に生かすようになるのは、ソ連崩壊後の1990年代後半からである (佐々木 1998, 2003; 高倉 2003)。しかし、そのような動きを推進したのは、先住民自身の意識の変化であって、民族学者の研究成果ではなかった。

そのような意味で、ソビエト民族学による西側人類学に対する調査、研究、批判は、

単に論評にとどまり、ソビエト民族学自身を脱皮させる原動力には活かされなかったといえるだろう。

4 E・ゲルナーのソビエト民族学評価とそれに対する反応

E・ゲルナーのソビエト民族学との対話の試みは、1974年にロンドン・タイムズの書評誌 (*Times Literary Supplement*, October 18, 1974, pp. 1166-1168) に最初に発表され、1975年にカレント・アンソロポロジー誌に転載された「ソ連と未開 (“The Soviet and Savage”)」という論文に始まる。この論文には50ものコメントがソ連、アメリカ、イギリス、フランスなどから寄せられた。それは当時の西側世界でソ連の人類学的な研究に大きな関心をもたれていたという事実を物語るだけでなく、ソ連側でもゲルナーの考え方に部分的にでも共感するもの、西側世界でも彼の意見に反対するものなど、ソビエト民族学に対して当時の東西冷戦という政治的な境界とは一致しない多様な見方があったということを示している。

ゲルナーはこの論文を、まずソ連の哲学者 L・V・ダニーロヴァ (L. V. Danilova) の「前資本主義社会の理論についての未解決の諸問題」(Spornye problemy teorii dokapitalisticheskikh obshchestv [L. V. Danilova et al. (ed.) *Problemy istorii dokapitalisticheskikh obshchestv*. Moskva: Nauka, 1968所収¹⁶⁾) という論文からの引用から始める。ゲルナーが引用した箇所ではダニーロヴァは、マルクス主義を取り巻く状況がマルクス主義の創始者たちの時代と現代(1960年代当時)とでは全く異なり、その間に人類は様々な経験をし、またマルクス等が遭遇したこともない諸問題に遭遇したこと、マルクス主義の社会進化論における5つの発展段階(未開社会、奴隷制社会、封建制社会、資本主義社会、社会主義社会)は、結局はヨーロッパの歴史的な経験から発生したものであり、他の諸大陸の歴史から得られるデータは世界の歴史を一筋の発展過程(unilineal process)として捉えることの限界を明らかにしてくれることを指摘している(Gellner 1975: 595)。すなわち、ダニーロヴァはマルクス主義においても人類社会の進化を論じるには、様々な発展過程を考慮に入れるべきだという多系進化説に近い考え方を表明したわけで、それは1960、70年代当時、西側世界の研究者が考えていた、教条的で強権的なソ連の学術状況のイメージとはかけ離れたものだった。しかし、ゲルナーはこのダニーロヴァの考え方の中に、ソ連流の歴史主義的な人類学の展望を見る。

ゲルナーはイギリス流の社会人類学とソビエト民族学(彼はしばしばソビエト人類学[Soviet anthropology]またはソビエト社会人類学[Soviet social anthropology]と呼んでいる)との決定的な違いは、後者が未だに考古学や歴史学などの歴史科学と決別していない点にあると考えていた。すなわち前者が人間社会を「機能主義的=静的社会観」で見ているのに対して、後者は「進化主義的=歴史的社會観」で見ているというの

である（Gellner 1975: 595）。その進化主義的＝歴史的社會観がマルクス主義、とりまなおさずモルガンに刺激されたエンゲルスの『家族・私有財産・國家の起源』で示された進化図式に依拠していることはいうまでもない。

マルクス主義ならば西ヨーロッパでも大きな影響力を持っており、フランス、イギリスでもいわゆるマルクス主義人類学は盛んであった。例えば、メイヤスー、ゴドリエらのフランス経済人類学やM・ブロックのマルクス主義研究などをあげることができる。しかし、ゲルナーはソ連のマルクス主義と西ヨーロッパのそれを対比して、前者がショートヘア・マルクス主義であるのに対して後者はロングヘア・マルクス主義だという（Gellner 1975: 596）。すなわち、後者がサロンの洗練されている反面、複雑な議論を経て非常にわかりづらいものになっているのに対して、ソ連のそれは明快でわかりやすく、実用的であるというのである。ゲルナーは直接説明してはいないが、ソ連のマルクス主義をショートヘアで譬えるとき、彼は1960、70年代のソ連の働く女性、とりわけ、プロパガンダ用のポスターに使われる女性像を思い描いていたのかもしれない。

さらにゲルナーは機能主義と比較しつつマルクス主義人類学、特にその5つの社会の発展段階を、5つの社会類型（アジア的社会を入れると6つになる）であるとして擁護する。すなわち、機能主義では1つの類型（すなわち未開社会）しか研究しないのに対してマルクス主義は複数の社会類型を設定しており、それぞれが理論的に充実した内容を持つ。その論理性は機能主義と同等であり、理論は決して教条主義的ではない。ゲルナーは何よりもソビエト民族学のマルクス主義理論への自由なアプローチに大きな印象を受けたようである。彼は、「ソビエト人類学者が事実上やっていたことは、この類型を洗練し、研磨し、解きほぐし、全体的に改良し、そして具体的な歴史学や考古学、民族学の資料に適用することである」と述べている（Gellner 1975: 597）。

ゲルナーは機能主義の社会人類学とマルクス主義のソビエト民族学を比較して興味深い平行現象を指摘している。それは双方ともほぼ同時に19世紀的な社会進化論からの転換（parallel shift）を図ったという点である。彼は西側世界の社会科学が進化主義を捨てたのは、制度の進化という概念が説明力に欠けていたことと、当時語られていた社会進化が世界各地の複雑で多様な歴史的現実に対して不適切であり、誤解を招いていたことによるものだと主張する。いいかえれば、その図式があまりにも単純でヨーロッパ中心主義的だったというのである。

それと同様にソ連のマルクス主義哲学でも単系的な社会進化に対する異論が出されていた。彼は論文の冒頭に引用したダニエーロヴァの論文から再び引用する。

前階級社会から階級が対立しあう状態を経て共産主義社会へと移行する人類社会に共通する発展図式の中でも、具体的な経路は様々であることは明らかである。とりわけ、奴隷制社会が普遍的に存在したという命題は放棄されるべきである。この事実だけでも（それはおそらく科

学の中では認められていることと思うが) 社会進化の基本的な姿を変えてしまう。従来の枠組みでは封建制社会は奴隷制社会の崩壊によって成立することになっていた。しかし、もし奴隷制度が一般的に見られるものではなかったとすれば、その後続く発展も異なるはずである。ヨーロッパ諸国の前資本主義的な社会構造は、同時代の他の地域の国々の社会構造とは異なるものだったのであり、そのような国の発展は資本主義に至るとは限らない。ヨーロッパで封建制として知られる社会構造はヨーロッパの外ではほとんど見られないのである (Gellner 1975: 597)。

ゲルナーはこのダニーロヴァの記述に、単系社会進化論からの脱却に関して、ソ連のマルクス主義 (あるいはソビエト民族学) と西側世界の社会科学 (あるいは社会人類学) の間に平行関係を見いだしている。しかし、彼は同時に両者の間の相違点にも気づいていた。西側世界の社会科学でこの単系社会進化論の放棄を声高に提唱したのは人類学者だけであり、しかもその時彼らが興味を抱いたのは「未開社会 (primitive society)」だけだった。したがって、進化主義に代わって登場した「機能主義」は、その気になれば1つの類型にしか適用できない理論と揶揄することもできる。それに対して、ソビエト民族学の場合には前資本主義社会に属するあらゆる類型からのデータを背景として、この単系社会進化論からの脱却が図られた。しかも、それは生産様式と生産関係を時代、社会類型を通して一律に評価してしまうことに対する疑問から始まった。ゲルナーによれば、ダニーロヴァは社会関係における政治的な要因の重要性に着目し、とりわけ未開社会 (ここでは親族関係が重要) と資本主義社会 (ここで初めて経済関係が重要になる) の間の段階 (奴隷制と封建制の社会) では、政治的な権力が社会関係で決定的な役割を果たすと見ていた (Gellner 1975: 598)。

さらにゲルナーは「未開社会」という概念の相違についても分析を加えている。彼によれば、西側世界では「未開社会」という概念は単に、小規模で社会関係が緊密で、都市化されておらず、孤立していて、文明と接触していてもそれは部分的な意味しか持たないという、1つのカテゴリーであって、そこに何らかの理論を見いだそうとするものではない。しかし、ソビエト民族学にとっては、それは5つの社会の発展段階の最初の1つであり、それは階級を持たず、それ故に階級間の対立によって生じるはずの国家制度を持つ可能性もない社会という明確な定義を有しているという。それは西側世界でいう「部族社会」を包含するが、しかし、そうすると、その多様性をどう扱うのが非常に難しくなる。ゲルナーはソビエト民族学では中心と周縁という概念を使って「未開社会」の多様性を説明しようとする研究者いることを指摘する。例えば、意図的に研究対象を孤立しているように区切って見れば部族社会に見える社会が、政治的な中心との関係で見れば、より大きな封建体制の一部であったということもあり、また、遊牧民などは一見政治構造を持たないように見えるが、彼らが支配する定住民との関係で見れば、歴とした階級が形成され、さらには国家体制すらできている場合がある。彼はそのような社

会の研究例として、ソ連でも有名なアフリカニストだったD・A・オリデロッケ (D. A. Olderogge) やL・E・クッベル (L. E. Kubbel), 遊牧民研究のA・M・ハザーノフ (A. M. Khazanov), インドネシア研究のYu・V・マレーチン (Yu. V. Maretin), そして中国研究のM・V・クリューコフ (M. V. Kriukov) を挙げている (Gellner 1975: 599-600)。

ただし、このような社会の発展段階に対するソ連の研究者たちの見方や研究方法も多様だった。5つの発展段階に固執するどころか「アジア的生産様式」の設定に固執するものもいれば、未開社会の共同体主義と資本主義社会の冷徹なまでの個人主義という両極端の間には、無数の発展の道のりがあると述べるものすらいた (Gellner 1975: 600)。

ゲルナーは論文の最後に、ソビエト民族学の重要な研究テーマの1つである初期人類社会の成立の問題と民族起源論の問題に触れている。それは彼にいわせれば西側世界の人類学には匹敵するものがない分野である。ただし、ここでも従来のエンゲルス、モルガン流の進化主義的発展段階論に固執する、あるいは補強しようとする考え方と、それを修正しようとする考え方が激しい議論を展開しているという。しかし、いずれにしても、そのような議論はソビエト民族学の通時的方法論、あるいは歴史主義的な側面の表れであり、それを特徴づけている。ゲルナーは次のように述べている。

ソビエト民族学も西側の人類学も古い進化論図式の経験主義的な素朴さと論理的なひ弱さに反対してきた。マリノフスキの後継者たちは一時的にせよ進化主義を完全に拒否するという形で反抗したのに対して、ソビエト民族学者たちはその図式を自分たちなりに多様化し、その中でさまざまな範疇について議論を重ねてきた。その結果、西側人類学は、社会構造を比較したり、あるいはそれらを歴史的な文脈の中に位置づけたりするための体系だった図式を完全に失うという代償を払わなくてはならなかったのに対して、ソビエト民族学は図式を持ち続けた。それはたまたま (未開社会概念のように) 思考回路に入ってきたのかもしれないが、価値ある刺激剤となりうるものだった (Gellner 1975: 600)。

ゲルナーは社会構造に関する体系化された類型を持つことは人類学にとって望ましいことであると考えていたようである。その上で彼が問題としたのは、ソビエト民族学のように、各類型を時間系列上に並べること、あるいは歴史の文脈の中で解釈することの妥当性である。彼はこの通時的、歴史主義的な方法論に理解を示している。ただし、教条的な唯物史観のような全体を統合するような社会進化のパターンを求めることで議論するのではなく、新石器革命や産業革命の時の変化のように、もっと対象を絞って議論した方がより成果は大きいだろうと主張する (Gellner 1975: 600-601)。

ゲルナーのこの論文に対して、先述のように、ソ連とアメリカ、ヨーロッパから多数の人類学者、哲学者、歴史学者がコメントを寄せた。その中には教条主義的なマルクス

主義のイデオロギーに則って全く的是な批判をしたものもあったが、多くは建設的な批判であった。ここでは当時第一線で活躍していたソビエト民族学者のコメントを紹介しておこう。

まず、民族学研究所長だった Yu・ブロムレイは、ゲルナーが「ソビエト民族学者は未だに人類社会の歴史に大きな関心を持っている」とした点はまさに正しく、歴史主義はソビエト民族学の神髄であると述べている。また、ソビエト民族学が「未開社会」だけを研究対象にしているわけではないという指摘も正しいと述べている。ブロムレイが問題としたのは、ゲルナーがソビエト民族学は前資本主義社会にターゲットを絞っているかのように述べている点で、ブロムレイは、ソ連国内の現代社会の状況も重要な研究対象であることを強調する。その上で彼は、ソビエト民族学の主要な研究対象はエトノスであるという。しかも、様々な発展段階にあるエトノスの研究をカバーすることから、その段階の相違によってテーマも変わってくる。未開社会では伝統的な部分が重要であるが、階級が生まれ、より分業が進んだ社会では、テーマが絞られてくるはずだというのである。そして、技術革新と大量生産を迎えた現代では民族の特徴は物質的なものよりも精神的なものによく表れるようになり、その結果民族帰属意識 (ethnic identity) の研究がより重要になる。また、エトノスの研究は学際的な研究を要求し、境界領域の分野の成長が必要であるとも述べている。ブロムレイはゲルナーのソビエト民族学に対する認識 (通時的、歴史的的方法論) を大筋で認めた上で、エトノス研究が中心にあり、そこから様々な問題、課題、研究方法、研究体制、分野が生まれてくるという形でソビエト民族学の特徴をまとめている (Bromlei 1975: 601-603)。

人類社会史の中でも「未開社会の」研究を専門とする A・I・ベルシツ (A. I. Pershits) は、ゲルナーの「未開社会」概念に対する批判、すなわち未開社会とみなされる社会が実に多様であり、平等的なものから成層化したものまで、無政府のなものから中央集権化されたものまで包含してしまう融通無碍な概念になっていることが弱点であるという批判に対して反論を加えている。ベルシツは、「未開社会」というものが人類社会誕生から国家形成期までの実に長大な時間の中で大きな部分を占める時代区分であり、そのために時代、地域によって多様な姿を見せるのは当然であり、他の時代の社会概念 (奴隷制社会や封建制社会など) と比べて弱いとはいえないというのである (Pershits 1975: 608-609)。

アメリカ先住民族文化研究に従事した経験を持つペトロヴァ＝アヴェルキエヴァは、ゲルナーのソビエト民族学がマルクス主義人類学で果たした役割を人類社会の一般類型の精緻化と、考古学・歴史学・民族学の具体的事例への適応であるとした点を肯定的に評価する。しかし、彼女はゲルナーのソビエト民族学者たちの業績の取り上げ方が偏っているのではないかと批判する。すなわち、ゲルナーは前階級社会や初期階級社会の研究に関して、ソ連国外での調査で活躍する民族学者の業績に大きな注意を払ってい

るが、それでは、ソビエト民族学の真価を測る上ではかえって誤解を招く。というのは、ソビエト民族学のフィールドは多民族国家ソ連の国内にあり、そこから重要な理論的貢献がなされているからである。ソビエト民族学は国内での調査研究に重心をおいているのであり、その点は国内の先住民族の研究から出発したカナダやアメリカとも同じではないかと主張するのである。そして、このような国内での調査で活躍する研究者たちの業績がゲルナーの関心から漏れている点を遺憾であるとする。ゲルナーは結局ソビエト民族学者の大部分が参加していない理論的な議論の方に注意を向けてしまっているが、実はこの大多数を占める国内をフィールドとする研究の方が、東西の人類学を橋渡しする多くの可能性を秘めていると主張し、S・ダンの研究を紹介している（Petrova-Averkieva 1975: 609-610）。しかし、全体的にアメリカ研究によって西側の人類学の状況に接する機会に恵まれていた彼女のゲルナーに対する評価は、上記のペルシツなどに比べればおおむね好意的である。

人類学的な研究も残したがむしろ哲学者というべき Yu・I・セミョーノフはゲルナーのマルクス主義哲学に対する理解に批判の矢を向けている。まず、マルクスやエンゲルスがいかにモルガンの社会進化モデルを理解し利用したのかについて、その必然性と批判的な対応を指摘した上で、マルクス主義と進化主義の関係について反論する。すなわち、ゲルナーは進化主義こそがマルクス主義的な社会観であるとみなしているようだが、今やマルクス主義的な社会観は19世紀に認められていたような単純でスムーズな発展史観とは全く異なるという。すなわち、多元的で時には相矛盾するような発展過程すら想定しているというのである。また、ゲルナーは進化主義の最大の欠陥は発展という事実に対して何の説明にもならなかったことだったと述べているが、史的唯物論の本質とは、歴史的発展とその真の原動力を説明することにあるのだというのである（Semenov 1975: 612-613）。

他にもロシア語で書かれたコメントは見られたが、当時ソビエト民族学の理論派として知られた民族学者からの反論はこの4つである。彼らの批判はいずれもゲルナーのマルクス主義的な社会進化論、社会発展論の理解に対する批判であり、当時のソビエト民族学がいかにそこに自分たちの人類学・民族学のアイデンティティを強く求めていたのかがよくわかる。ゲルナーは構造機能主義を基礎とした当時のイギリス社会人類学の中では、かなりマルクス主義的な社会類型論や発展段階論、そして歴史主義的な人類学方法論に理解を示しており、それらを高度化、洗練化させた点でソビエト民族学を高く評価する傾向にある。しかし、それでもソ連の人類学者や民族学者には、まだ自分たちの研究の神髄を評価してもらっていないという感想をもったのだろう。ただし、ここにコメントを提出した研究者たちは総じてゲルナーのソビエト民族学に対する関心と理解度の高さは評価している。

5 結論——ソビエト民族学が人類学になし得る貢献

ゲルナーのソビエト民族学をより深く知ろうとする試みは1976年のブルク・ヴァルテンシュタインでのシンポジウムで一応の結実を見る。その成果としてまとめられた論集にはマイヤー・フォーテスが序論を執筆し、西側人類学サイドからはクレイダーやハンフリー、モーリス・ゴドリエ (M. Godelier, フランスの経済人類学者) のようにマルクス主義に詳しい人類学者の他、狩猟採集社会研究で新たな境地を開いたJ・ウッドバーン (J. Woodburn), 言語と思考の問題を追及してきたJ・グッディ (J. Goody) らが顔をそろえたとともに、ソビエト民族学側からはプロムレイ、ペトローヴァ・アヴェルキエーヴァ、セミョーノフ、ベルシツ、V・バシーロフ (V. Basilov, 中央アジアのシャマニズムの専門家) など理論派の民族学者が論陣を張った。このシンポジウムの詳細と評価はDragadze (1978) に詳しいが、それによれば、この時西側の人類学者たちは自分たちが暗黙のうちに承知していた人類学の定義を覆されるほどの新鮮な衝撃を受けたようである (Dragadze 1978: 119)。

結局は共時的研究であり、研究対象の歴史性を捨象し、解釈から歴史的な文脈を排除する方向に向かった機能主義的、構造主義的な西側の社会／文化人類学と、研究対象の社会を類型化して、それを歴史的な文脈 (発展史観) で解釈しようとするソビエト民族学との相違点が顕著となる結果となったことは否めない。しかし、それでも議論が平行線をたどることなく、かみ合ったのは、やはりカール・マルクスが築いた哲学、あるいは「マルクス主義」という巨大な思想が、人類学も含むヨーロッパの知の体系の中で厳然たる存在感を持っているからである。それは、ひとえにマルクスが巨人だったというのではなく、マルクス主義もまたヨーロッパで啓蒙主義から近代合理精神を経て培われてきた知の体系の中に位置づけられており、そのことがソ連を含むヨーロッパの知的作業に従事する人々に共有されていたことを意味している。そして、西側、ソ連双方で19世紀的な社会類型論や発展段階論からの脱却が独自に図られ、その成果がここで相互に披露され、議論されたわけである。

したがって、ゲルナーがソビエト民族学の社会類型論や社会発展論、あるいは未開社会研究、さらにはエトノス論や民族起源論、民族過程論などを好意的に評価していることも、全く不思議なことではないわけである。すでに指摘したように、彼は、西側で素朴な社会進化論から脱却するためにマリノフスキ革命が起こり、機能主義人類学が誕生したのと平行するように、ソ連でも、時代は若干ずれるが、教条主義的な社会発展段階論からの脱皮が図られ、そこから独自の社会類型論や社会発展モデルの確立が模索されたと解釈したのである。

ソビエト民族学者たちのゲルナーの1975年の論文に対するコメントは、結局ソ連におけるマルクス主義哲学の動向を正確には把握できていないとする点と、ソビエト民族

学の幅の広さに注意が向けられていない点に集中している。そのためもあって、彼らはゲルナーが論文の最後に提起した問題にはきちんと答えていない。すなわち、彼らが抽出する社会類型を発展段階のような歴史的な文脈において解釈することの妥当性についてである。ゲルナーは人類社会史の一時代（新石器革命や産業革命など）を切り取って分析するときには妥当性を認めているが、史的唯物論にあるような人類社会の歴史的過程を全て包含するような一般的な文脈で解釈することに対しては疑問を呈している。しかし、ソビエト民族学の側はそれに対しては十分なコメントをしていない。

セミョーノフ等が提唱した2段階飛躍説はあくまでも人類が他の霊長類と分かれてから、現世人類が誕生して独特の社会を築くまでのことを扱っているものであり、ペルシツの未開社会研究も階級発生、国家誕生以前である。彼らの研究もあくまでも人類社会史の一部でしかない（時間的には人類社会史の大部分を占めてはいるが）。しかし、彼らの議論は常に未開社会から社会主義社会へ至る包括的な人類社会発展史の中に位置づけられ、その枠の中で進められている。全体を包括する理論の上に、特定の時代や地域の社会類型を説明する理論を持つということは、彼らが自己主張するように、ソビエト民族学の優れた点の1つということができる。

また、ソビエト民族学では人類社会の表現型としての多様性を重視している。ペトローヴァ＝アヴェルキエーヴァがブルク・ヴァルテンシュタインでのシンポジウムで、「あるエトノスの社会生活の中で、民族学者たちは経済、政治、イデオロギーが織りなす相互依存関係を追求してきた。彼らは様々な歴史的条件下における下部構造と上部構造の独自の関係性と経済動向の長期的で決定的な役割を解明しようしてきたのである」（Petrova-Averkieva 1980: 24）と述べているように、ソビエト民族学者たちは決して自らが調査する個々の事例を包括理論に教条主義的に当てはめていくのではなく、包括的理論の文脈の中で、個々の事例の特殊性を解明していく方向で研究を進めていたといえるだろう。その包括的な理論の中核をなしたのは、史的唯物論の5つの社会類型とその発展段階論にあったのは事実だが、それよりも、包括的理論が提供したもっと重要なものは、下部構造と上部構造の関係性という考察や解釈の方法論上の枠組みであった。そこから調査対象の社会の経済的、政治的、イデオロギー的な各要素間の関係性を見て取るという研究方法が確立されていったわけである。このように見ていくとソビエト民族学者たちの個々の調査事例とマルクス主義的包括理論との関係はきわめて健全なものであり、それは西側世界の社会人類学の機能主義や構造主義といった解釈や考察の基本的な方法論と実際の調査事例との関係と同等である。

しかし同時に、その包括的な理論は、社会発展の最終目標を社会主義社会あるいは共産主義社会というところに定めてしまっている点で、19世紀的な進化主義と位相的に同等でもあった。19世紀の社会進化論は進化の最終段階を当時のヨーロッパ社会に求めており、その点が後の人類学の批判の主たる対象となった。それに対して史的唯物論で最

終段階の社会形態にあたる社会主義社会あるいは共産主義社会は理論上のものである。しかし、1970年代当時はソ連を始め東欧、モンゴル、中国、ヴェトナム（後にカンボジアとラオス加わる）、キューバに社会主義社会実現を標榜する国家が存在し、その他アジア、アフリカ、中南米で社会主義国家樹立を目指す政治的な運動が起きていた。そのような現実の中では、社会主義社会という概念も現実にある国家に見られる社会体制を想起させることになり、19世紀の社会進化論が説く「文明社会」が西ヨーロッパの社会を想起させたのと同じになってしまうのである。

また、史的唯物論そのものが社会形態の「変化（change）」あるいは「移行（shift）」を「発展（development）」という概念で捉えている点も、人類社会史の包括的理論の手足を縛る一因となった。この「発展」という概念はソビエト民族学の理論的研究で重要な位置を占めていた。例えば、ペトローヴァ＝アヴェルキエーヴァは同じブルク・ヴァルテンシュタインのシンポジウムで、「あらゆる社会形態は前進する世界史の中で自然に形成される段階である」（Petrova-Averkieva 1980: 22）、あるいは「マルクス主義の歴史学者が単系進化論者と異なるのは、革命的な飛躍や、後退やジグザグを描くような過程を認識している点である」（Petrova-Averkieva 1980: 24）などとも述べている（下線は筆者）。ここで筆者が強調したことはそれぞれ onward march, revolutionary leaps, retreat, zigzag ということばで訳出されている（彼女の論考はロシア語で書かれたものだが、出版されるときに英語に翻訳されている）。セミョーノフも同じくブルク・ヴァルテンシュタインでのシンポジウムで「歴史的発展（historical development）」ということばを多用する。例えば「社会経済的な形態、すなわち歴史的発展の一段階」（Semenov 1980: 29-30）という具合である。つまり、マルクス主義の人類社会に関する包括的な理論ではこのような「発展」と密接に結びつくことばがキーワードや比喩として多用されるのである。

ここで私が問題としたいのは、「発展」という概念のもつ一般的な肯定的なイメージではなく、それが持つ否定的なイメージの方である。この概念は時には研究者、特に歴史や変化の過程を追うような研究者にはやっかいなことばであり、時には自由な思考を束縛するすらある。

このことばには一定の価値観が含まれており、それに基づいて、後の段階のものが前のものよりも「優る」あるいは「高い」という優劣の判断が行われる。史的唯物論の場合には生産力の増大という基本的な価値判断に基づき、増大した生産力と矛盾しない社会制度を持つ社会がより優れた社会であるとされる。すなわち、階級のない未開社会より、奴隷と王侯、神官という階級が生まれた奴隷制社会の方が発展段階としては高いとされ、順次、奴隷制よりも農奴や都市市民と封建領主が対立する封建制社会の方が、封建制よりも労働者と資本家が対立する資本主義社会の方が高い段階にあるとされる。そして、究極の段階で階級対立が解消されて共産主義社会が実現されることになる。ペト

ローヴァ＝アヴェルキエーヴァの「前進する世界史 (the onward march of world history)」という表現も、彼女が人類史をそのような価値判断に基づいて理解していたことを如実に示している。そして、発展を柱におくからこそ、それに対して時には停滞、後退、あるいは横道にそれるジグザグや、昔の状態が再現される回帰といった状況の存在を認めることになる。

しかし、社会類型に時代の前後関係による優劣や高低があるのだろうか。後の時代の状況が前時代の状況に比べて、優れていたり劣っていたりするのだろうか。マルクス主義は時代を動かす原動力として「生産力」に着目し、その大きさと大きくなった生産力といかに整合できるかという点で、各時代の社会類型に優劣をつけた。確かに、ある種の限られた要因に着目して、変化する過程を段階として類別すれば、時代による社会形態の優劣も可能かもしれない。しかし、その結果得られる発展と飛躍、あるいは停滞や後退の歴史はどの要因に着目するかによって全く異なってくる。例えば、ある民族集団が他の集団に飲み込まれて消滅してしまうような現象が、別の要因で見れば、民族対立が異なるレベルの集団の統合となり、社会史的には飛躍と判断されるようなこともあり得る。

マルクス主義ではそのような諸要因の中で特に生産力と生産関係を最も主要な要因として着目し、そこから1つの社会発展に関する包括的な理論を構築した。しかし、社会変化の過程をすべて生産力の増大を指標とした発展という概念で捉えたために、それ以外の要素によって引き起こされる変化を過小評価することになり、政治的、社会的、文化的ないくつか重要なポイントが見失われることになった。例えば、筆者が専門とする極東ロシア南部の先住諸民族の場合、ソビエト民族学では、彼らの社会は階級のない未開段階にあり、社会の基本構造は氏族制度によって支えられていたが、それが部分的に崩壊し、奴隷制の萌芽が見られる程度の段階にあったというのが一般的な解釈であった（ただし、この種の解釈は結局シベリア、極東のあらゆる先住民族についてなされている）。しかし、彼らの歴史を中国や日本に残されている古文書まで視野に入れて検討すると、彼らが王朝中国（特に元、明、清）の冊封体制の中に組み込まれ、中国の王侯貴族と同列の特権階級から食うや食わずの貧民までいる「階級社会」であって、マルクス主義的な発展段階論で見ても、決してソビエト民族学で認められていたようなレベルの社会ではなかったことがわかる。

なぜこのようなことになるのかといえば、ソ連の民族学者たちには中国や日本の史料に接することができなかったという資料上の問題とともに、マルクス主義の生産力と生産関係を基礎とした発展史観が災いしていたのである。確かに極東ロシア南部の先住諸民族たちの生産基盤は狩猟と漁撈と採集であり、一見農耕開始以前の狩猟採集社会の残滓のように見える。史的唯物論の社会発展段階論では、農耕開始以前の狩猟採集社会は無階級社会である。しかし、19世紀中期までの彼らの生活基盤は、中国の冊封体制が保

障する数々の物質的、精神的恩恵に大きく依存しており、それが狩猟や漁撈だけでは支えきれない程の上部構造（特権的な社会生活や洗練された精神文化）を築き上げることを可能にしていた。つまり、富の偏在的な蓄積が起こり、富める者と貧しいもの、生産手段を持つ者と持たないもの、支配する者（中国の冊封体制の中で高官に任命された者）と支配される者（庶民）という、階級差が生じていたのである。

ソビエト民族学が極東ロシア南部の先住諸民族を「誤って」未開社会と位置づけたのは、現時点から見ると、次の3つの点に問題があったからだといえる。そして、それらはいずれも生産力の増大を指標とする社会の「発展」という発想に拘束されていたことと関係する。

1つは、狩猟採集社会でも富の蓄積が行われ、その相違によって貧富の差が生じ、場合によっては階級差も生じる可能性があるという発想を持たなかった点である。1970年代後半にイギリスのJ・ウッドバーンが提唱した狩猟採集社会の経済システムの2つの類型、すなわち「即時消費型（immediate-return systems）」と「時間差消費型（delayed-return systems）」の内、後者においては、狩猟採集行為とその成果である獲物や収穫物との消費との間に時間差があるために、食料の貯蔵が行われ、その結果富の蓄積、富の偏在、社会階層の発生、そして階級への分化へとつながっていく（Woodburn 1980: 98）。その典型的な事例は豊富なサケ・マス資源に依拠したアメリカ北西海岸の先住民たちであるが、それは彼らだけの特異な現象ではなかった。極東ロシア南部の先住民の生産活動も彼らと同様に、豊富なサケ・マス資源に依拠していたことから、たとえ中国の支配を受けなくても、階級分化する素地はあった。

第2の点は、アムール川下流域や沿海地方、サハリンの先住民族の事例では、生産力に商業活動と政治体制が大きく介入していた点に、この地域を研究していたソビエト民族学者が気づかなかったことである。この地域の先住民族の祖先たちの生産活動は、基本的に狩猟、漁撈、採集と小規模の畑作であったが、その経済基盤はこのような生業だけにあったわけではなかった。彼らは近隣の諸民族や、中国、ロシア、日本といった国家を相手とした交易活動を活発に行っており、それによって莫大な富を蓄積することができた。さらに、中国の冊封体制は、中華王朝に対する貢ぎ物の納付と王朝からの恩賞の下賜を柱として成立していたが、その下賜される恩賞も大きな経済効果を持っていた。つまり、彼らの経済的な基盤、すなわちマルクス主義でいうところの下部構造は、決して生業だけで成り立っていたのではなく、商取引と政治的な取引という上部構造から環流される財も重要な要素だったのである。この地域を研究してきた人類学者や民族学者はほとんどがその点を見落としていた。ダニーロヴァが資本主義社会以前では政治が生産力や生産関係で非常に大きな意味を持つことを指摘していたように、史的唯物論あるいはそれを基礎にしたソビエト民族学の枠組みの中でもこの点に気がつくことはできた。この点を見落としていたのは、単純な発展史観が、置かれた状況によっては狩猟採集社

会がより複雑な経済基盤を持ちうるという発想を阻害したからである。

そして、第3の点は、極東ロシアの先住民社会が中国を中心とする巨大な封建的政治経済体制の一部に組み込まれていたという事実気がつかなかった点である。ゲルナーも指摘していたように、ソ連の民族学者でも、例えば一見閉鎖された小さなコミュニティと思われるものが、視野を広げてみると巨大な封建体制の一部をなしていたという事例に気づくものがいた。実は19世紀中期までのアムール川流域や沿海地方の先住諸民族の社会はそのような事例の典型的なものだったのである。しかし、ソ連の民族学者たちは結局それに気がつかなかった。それには、使える資料の限界（使用可能言語の限界）、先住民族自身の経済状況の実際の悪化（支配者が帝政ロシアに交替し、王朝中国から受けていた恩恵を失った）、そして、ロシア、ソ連の政治的な判断（王朝中国が、帝政ロシア進出以前からこの地域を実効支配していた事実を認めたがらない）などが関係していたが、何よりも重大なのは、民族学者たちの視野の狭さと発展史観による自由な発想の阻害である。彼らは狩猟、漁撈、採集という表層に見える生産活動だけから生産力の大きさを判断し、先住民族の社会を最も「発展」していない社会と見なし、未開社会の段階に位置づけてしまったのである。

では、1858年のアイグン条約と1860年の北京条約でアムール川流域や沿海地方が帝政ロシア領となることによって、先住民たちの社会は「発展」したのだろうか、それとも「停滞」ないし「後退」したのだろうか。

経済生活や社会生活の面ではかえって後退したといえる。商取引と政治的な取引によって上部構造から下部構造に環流していた財の流れが、新しい国家（帝政ロシア）によって断ち切られてしまったからである。そして、多くの人々が物資の不足に悩まされるようになるとともに、ロシア人の進出で猟場や漁場を追われる人々、移民がもたらした病気やアルコールの害で命を落とす人々などが続出し、全体的に貧しくなったのである。時には村落組織だけでなく民族的な集団の崩壊も起きた。しかし、他方で、進出したロシア人たちがうまくつきあい、成功し、豊かになった人もいないことはなかった。また文化的にもヨーロッパの文化が流入し、狩猟や漁撈でも鉄砲や漁網などの生産効率の高い用具が導入され、生産性が上がることもあった。結局、このとき起きたのは、前近代から近代への時代の転換の中で起きた社会全体の崩壊と再編であって、決してソビエト民族学者が想定していたような未開社会の氏族制度の崩壊ではなかった。

ソ連時代にはいると、社会主義政府はヨーロッパで生まれた生産効率の高い用具類やライフライン、インフラストラクチャーを割安な価格で提供、整備することで、ヨーロッパ的基準でみた生活水準の向上に成功した。農業や畜産業、あるいは鉱工業や知的労働なども導入されて、帝政時代やその前の中国王朝時代よりも生産力は全体的に向上した。マルクス主義的な発展史観で見れば、ソ連時代の先住民族社会は明らかに「発展」したといえるだろう。しかし、それは政治的に演出された「発展」という側面を持っており、

政治的取引を通じて再び上部構造から下部構造に財が環流していたのである。その意味ではソ連の社会主義的な政治体制は前近代的な王朝中国の支配と同じである。

しかしそれ故に、先住民族側が失った代償も小さくなかった。彼らが自分たちの「民族」あるいは個人のアイデンティティの基礎となっていた数々の伝統的な文化が消されていったからである。その中には狩猟や漁労のための伝統的な装備や用具も含まれていた。近代的な装備は生産性を向上させたが、その供給と維持は社会主義政府が整備した政治性の高い経済体制や流通システムに全面的に依存していた。ソ連崩壊後そのような体制やシステムが崩壊したが、それは帝政ロシアの支配が始まったときに王朝中国が築いたシステムが崩壊したときと同じ効果をもたらした。いいかえれば、ソ連が先住民族の間で築いた社会主義社会は、前近代的王朝国家と同じ方法をつかって中央政府によって支えられていたわけで、先住民族の社会はそれで発展したわけでも、後退したわけでもなかった。結局、「発展」をキーワードにした包括的な理論で現象をすべて説明することはできないのである。

そのように考えてくると、ソビエト民族学が標榜した「発展」をキーワードとした包括的な人類社会史の理論は、個別の社会史あるいは民族史を説明するための思考方法を特定の方向に向かうように拘束し、時には重要な要素すら見失わせることにもなっており、歴史的事実に即した理論化やモデル構築を困難にしているとさえいえるだろう。ロシア極東南部の先住諸民族の社会史あるいは民族の歴史は、「発展」という価値判断を伴う概念ではなく、「変化」、「推移」というより中立的で価値判断を伴わない柔軟な概念を使って理解、説明するのが妥当であろう。それはまた個別社会の歴史的解釈から包括的な理論を構築する際にも重要な点となる。

では、ソビエト民族学は世界の人類学において貢献するところはないのだろうか。

まず、現代ロシアの人類学、民族学、民俗学、あるいは最近盛んになってきた文化学¹⁷⁾の動向を知るには、それらの前身であるソビエト民族学の知識が不可欠である。序論でも述べたように、ロシアでも旧西側の人類学の理論や方法論が導入されたとはいえ、旧ソ連時代の理論や方法論も、その根幹部分はまだ受け継がれている。また、旧ソ連地域では研究対象とされる文化や社会がソビエト民族学の影響下にあった。したがって、旧ソ連地域をフィールドとして人類学的、民族学的研究を行おうとするには、ソビエト民族学の基礎知識が必須なのである。それを持たずに調査すると、誤った本質主義的な文化構築や、逆に過度に脱構築にこだわった民族誌記述に陥る危険がある。

しかし、筆者は現代ロシア研究の基礎知識としての貢献以外にも、ソビエト民族学の理論や方法論が現代の人類学や民族学に貢献するところがあるのではないかと考えている。それは、歴史主義的な方法論である。史的唯物論をそのまま援用する研究者はもはやいないが、それでもマルクスの哲学やマルクス主義の思想が世界の人文社会科学に残した影響は絶大なものがある。それほど大きな影響力は持たないが、ある社会や民族の

歴史過程に着目し、その現在の姿を歴史的な文脈において解釈するというソビエト民族学が培った方法論も、社会の歴史性を捨象しすぎた20世紀の社会人類学や文化人類学を立て直す原動力の1つにはなりうるものである。また、社会や民族集団を有機体として生成から消滅までを追う、その変化の原動力を追求するという方法や、その過程で展開される経済、社会、イデオロギーの関係性とその推移過程を追うという方法も、変化が激しく、集団間の離合集散も活発な21世紀の社会を研究する上では有効ではないかと思われる。

ソ連崩壊によって完全に時代遅れと思われるがちなマルクス主義的な哲学、歴史観に依拠したソビエト民族学は、日本でそれを知る人はごく限られた専門家だけである。しかし、それには、ロシアの民族学者や人類学者さえ気がつかない新しい可能性がまだ残されているかもしれない。

注

- 1) 筆者が個人的に知り得た範囲では、組織的な交流としては、国立民族学博物館が中央・北アジア展示の製作のために、当時同館教授だった加藤九祚を通じてソ連科学アカデミー民族学研究所 (Institut etnografiya AN SSSR, 現在はロシア科学アカデミー民族学人類学研究所 Institut etnologii i antropologii RAN) やソ連諸民族博物館 (Gosudarstvennyi muzei etnografii SSSR, 現在はロシア民族学博物館 Rossiiskii etnograficheskii muzei) などとの協力関係を築いた例がある。
- 2) 冷戦下のイギリスやアメリカではソ連研究に政治的な意図がないはずはないが、人類学の場合には、研究成果としての論文等に直接それが現れないことが多い。例えば本文で触れているクレイダーや、ヴキニッチ、ダン、ドラガセらの論文は、その後政策立案者たちにどのように利用されたかは追跡できないが、直接政策立案に役立つ情報を与えるようには書かれていない。
- 3) 人類社会が手にするエネルギーの増大によって社会が進化するという単系進化説を提唱した。
- 4) 社会は、世界各地でそれぞれの環境に適応するように、独自の進化過程を経てきたとする多系進化説を提唱した。
- 5) 当時ゲルナーがソビエト民族学と交流を行った目的については高倉が端的にまとめている。それによれば、「ソビエト民族学の思考枠組——(1) 経済と政治形態の関係 (上部構造と下部構造), (2) 人類社会の (発展段階的) 類型論, (3) 人類史における民族概念の位置づけ (民族起源・エスニシティ) 等——を彼らに問うと同時に、自らが対応する議論を応酬するものだった」という (高倉 2004: 72)。
- 6) レニングラードの学派の栄光と挫折は Slezskin (1992) と 栢本 (1994) に詳しい。
- 7) マール学派の民族学批判に関しては、田中 (1978)、宇山 (2005) を参照。
- 8) ソ連の民族学者で北アメリカ先住民社会を専門としていたが、西側の人類学理論にも精通していた。
- 9) アメリカの新進化主義の提唱者の1人で、アマゾンや中米の熱帯森林地帯の農耕文化に関する比較研究を行い、文化を環境に対する適応関係で捉える理論を提唱した (Meggers 1954)。
- 10) ソ連の人類学者で、シベリアの先住民族の形質的な分類や文化の類型化を行うとともに、人類

進化史の理論的な研究も行った。

- 11) ブロムレイはそれに相当するより抽象的な概念として「エトニコス (etnikos)」という概念を措定した。それは英語のエスニシティ (ethnicity) に翻訳可能だという (高倉 2004: 72)。
- 12) V・シュニレルマン (Viktor A. Shnirelman) によれば、民族起源論は中央の政治的統制が厳しかった旧ソ連時代の学界において比較的自由に議論できる場であったという。しかし、他方でそれは個別の民族に、特定の領域を占有し、特定の文化特性を有し、自治政府を持つための正当性を主張する根拠を与えて、ソ連崩壊後にはその「起源」をめぐる複数の民族が対立し合う事態にまで及んだという (Shnirelman 1996)。シュニレルマンが分析したのはカザン・タタールとチュヴァシの事例で、彼らはともにその起源を12~13世紀にヴォルガ川中流域に国家を築いたブルガルに求めて、競合した。
- 13) 読解可能な言語の限界と史料・資料類の選択の問題は、ソビエト民族学だけでなく、欧米の人類学に共通する問題である。アムール川流域とサハリンの先住民族の研究に欧米の人類学者が参入できない理由はそこにある。サハリンのニヴフの歴史に関して優れた研究を残したB・グラント (Bruce Grant) ですら、1850年代にロシアがサハリンに進出する以前の状況については沈黙せざるを得なかった。彼は間宮林蔵の『北夷分界余話』の部分的な翻訳を使って、そこに描かれる姿が、L・Ya・シュテルンベルクらが描く19世紀末期の民族誌と全く異なることを指摘したが (Grant 1995: 50-51)、それ以上の分析はできなかった。アムール川下流域とサハリンには中国、モンゴル、満洲、ロシア、そして日本という文字記録を持つ国家や民族が関係し、それぞれ文書記録を残しているために、たとえ人類学的な研究でも、最低中国語 (漢文)、ロシア語、満洲語、日本語の資料や史料を読解する能力が要求される。その上、19世紀以降の民族誌は英語、ドイツ語、フランス語などでも書かれているために、それらの言語の読解能力も必要である。これらの資料や史料に最も接しやすいのは中国、ロシア、日本の研究者である。しかし、彼らはこの地域に直接政治的、経済的な利害関係を持つ国の出身者であり、その記述に客観性あるいは政治的中立性を求めるには限界がある。そのために、直接利害関係を持たないヨーロッパやアメリカの人類学者や歴史学者によるフィールドデータや一次史料を使った研究が求められるが、この言語の壁が大きく立ちはだかり、なかなか進展しないようである。1970年代に出版されたハワイ大学の歴史学者J・ステファン (John Stephan) のサハリンの歴史的研究は数少ない例である (Stephan 1971)。
- 14) 以下グリグリエヴィチが引用した部分は、直接オリジナルの文献から引用する。
- 15) 1970年代当時、アイヌの人々が日本の人類学、民族学に対して批判的な態度をとることがあった。ボン・フチ (1987) などを参照。
- 16) この論集については、1971年にS・ダンが『アメリカン・アンソロポジスト誌』 (*American Anthropologist*) に書評を書いている (Dunn 1971: 828-829)。
- 17) kul'turologiya、現代の文化現象を多面的に捉えようとする、ポスト社会主義時代のロシアで急速に普及した研究分野。哲学や文学に近いが、方法論的には社会学、歴史学、人類学、民俗学などの理論や方法論も援用される。欧米で盛んだったいわゆるカルチュラル・スタディーズ (cultural studies) とは異なる。

文 献

アルチューノフ, S.

- 1962 「民族学的日本訪問記——ソヴェート民族学者の日本の印象」『民族学研究』26 (4): 302-309.

ブロムレイ, Yu. V. 編

- 1974 『マルクス主義と人類社会の起源』中島寿雄訳, 東京: 大月書店 (Ю. В. Бромлей и др. (ред.) *Проблемы этнографии и антропологии в свете научного наследия Ф. Энгельса*. Москва: Издательство «Наука»).

Bromlei, Yu., V. (Бромлей, Ю. В.)

- 1975 Comment to “The Soviet and the savage”, *Current Anthropology* 16 (4): 602-604
1979 О предмете культурной-социальной антропологии и этнографии в трактовке англо-американских и советских ученых (опыт сравнительного анализа). In Ю. В. Бромлей, И. Р. Григулевич, и Э. А. Рикман (ред.) *Этнография за Рубежом: Историографические очерки*, стр. 7-22. Москва: Издательство «Наука»
1980 The object and the subject-matter of ethnography. In E. Gellner (ed.) *Soviet and Western Anthropology*, pp.151-160. New York: Columbia University Press.

Bromlei, Yu. V. et al. (eds) (Бромлей, Ю. В. и др. ред.)

- 1973 *Этнологические исследования за рубежом: Критические очерки*. Москва: Издательство «Наука».

Bromlei, Yu. V., I. R. Grigulevich, and P. I. Puchkov (eds) (Бромлей, Ю. В., И. Р. Григулевич, и П. И. Пучков ред.)

- 1976 *Концепции зарубежной этнологии: Критические этюды*. Москва: Издательство «Наука».

Bromlei, Yu. V., I. R. Grigulevich, and E. A. Rikman (eds) (Бромлей, Ю. В., И. Р. Григулевич, и Э. А. Рикман ред.)

- 1979 *Этнография за Рубежом: Историографические очерки*. Москва: Издательство «Наука».

Dragadze, T.

- 1978 A Meeting of Minds: A Soviet and Western Dialogue. *Current Anthropology* 19 (1): 119-128.
1980 Soviet Ethnos Theory. *RAIN* 38: 3-4.

Dunn, S.

- 1962 Directed culture change in the Soviet Union: Some Soviet studies. *American Anthropologist* New Series 64 (2): 328-339.
1971 Reviewed work: *Problemy istorii dokapitalisticheskikh obshchestv* [Problems of the History of Pre-Capitalist Societies.] by L. V. Danilova. *American Anthropologist* New Series 73 (4): 828-829.
1975 Comment to “The Soviet and the Savage”. *Current Anthropology* 16 (4): 604.

Gellner, E.

- 1975 The Soviet and the Savage. *Current Anthropology* 16 (4): 595-617.
1980 (ed.) *Soviet and Western Anthropology*. New York: Columbia University Press.

- Gough, K.
1968 New Proposals for Anthropologists. *Current Anthropology* 9 (5): 403-435.
- Gant, B.
1995 *In the Soviet House of Culture: A Century of Perestroikas*. Princeton: Princeton University Press.
- Grigulevich, I. R. (Григулевич, И. Р.)
1976 Социальная антропология: Есть ли у нее будущее? In Ю. В. Бромлей и др. (ред.) *Концепции зарубежной этнологии: Критические этюды*, стр. 5-25. Москва: Издательство «Наука».
- Humphrey, C.
1983 *Karl Marx collective: Economy, society, and religion in a Siberian collective farm*. Cambridge and New York: Cambridge University Press.
1984 Some Recent Developments in Ethnography in the USSR (Review Article). *Man New Series* 19 (2): 310-320.
- 加藤九祚
1966 「ソ連邦におけるシベリアの民族学的研究の現状」『民族学研究』31 (3): 239-241.
- 香山陽坪
1952 「最近のソ連民族誌学」『民族学研究』16 (3/4): 321-329.
- Krader, L.
1959 Recent Trends in Soviet Anthropology. *Biennial Review of Anthropology* 1: 155-184.
1975 Comment to "The Soviet and the Savage." *Current Anthropology* 16 (4): 605-606.
- Levi-Strauss, C.
1966 Anthropology: Its Achievements and Future. *Current Anthropology* 7 (2): 124-127.
- レーヴィン, M. G.
1960 「北シベリアおよび極東におけるソヴェートの民族誌研究」『民族学研究』24 (1/2): 1-14.
- Lewis, D.
1973 Anthropology and Colonialism. *Current Anthropology* 14 (5): 581-602.
- 栞本 哲
1994 「レニングラード民族学派——クレイノヴィチを育んだ学問的土壌」E. A. クレイノヴィチ『サハリン・アムール民族誌——ニヅフ族の生活と世界観』栞本哲訳, pp.378-395, 東京: 法政大学出版局。
- 松園万亀雄
1962 「ソヴェト民族学における〈経済・文化型〉および〈歴史・民族誌的領域〉の概念——シベリア諸族の研究を中心に——」『社会人類学』3 (3): 73-82.
- Megggers, B. J.
1954 Environmental Limitation on the Development of Culture. *American Anthropologist New Series* 56 (5): 801-824.
- 西村朝日太郎
1950 「ソビエト人類学の近況」『民族学研究』14 (4): 327-331.
- オクラードニコフ, A. P.
1960 「最近の研究による沿海州の古文化」『民族学研究』24 (1/2): 15-32.

小野澤正喜

1984 「マルクス主義と人類学」綾部恒雄編『文化人類学15の理論』pp. 133-161, 東京：中央公論社。

2006 「マルクス主義と文化人類学」綾部恒雄編『文化人類学20の理論』pp. 90-107, 東京：弘文堂。

Pershits, A. I.

1975 Comment to “The Soviet and the Savage.” *Current Anthropology* 16 (4): 608-609.

1980 Ethnographic Reconstruction of the History of Primitive Society. In E. Gellner (ed.) *Soviet and Western Anthropology*, pp.85-94. New York: Columbia University Press.

Petrova-Averkieva, Yu. P.

1975 Comment to “The Soviet and the Savage.” *Current Anthropology* 16 (4): 609-611.

1980 Historicism in Soviet Ethnographic Science. In E. Gellner (ed.) *Soviet and Western Anthropology*, pp.19-28. New York: Columbia University Press.

ボン・フチ

1987 『ユーカラは甦る——アイヌ語世界への入門』東京：新泉社。

佐々木史郎

1998 「シベリア・極東先住民のエスニシティと文化表象——地方博物館の展示をめぐる」田畑伸一郎編『スラブ・ユーラシアの変動——自存と共存の条件』（全体研究集会報告集6）pp. 59-71, 札幌：北海道大学スラブ研究センター。

2001 「近現代のアムール川下流域と樺太における民族分類の変遷」『国立民族学博物館研究報告』26 (1) : 1-78。

2003 「ロシア極東地方の先住民のエスニシティと文化表象——アムール川下流域における先住民村落の民族資料館の展示を中心として」瀬川昌久編『文化のディスプレイ——東北アジア諸社会における博物館、観光、そして民族文化の再編』pp. 49-68, 仙台：東北大学東北アジア研究センター。

セミョーノフ, Yu. I.

1983 『人類社会の形成』中島寿雄・中村嘉男・井上絃一訳, 東京：法政大学出版会（Ю. И. Семенов 1963 *Как возникло человечество?* Москва: Издательство «Мысль»）。

Semenov, Yu. I. (Семенов, Ю. И.)

1975 Comment to “The Soviet and the Savage.” *Current Anthropology* 16 (4): 612-614.

1980 The Theory of Socio-economic Formations and World History. In E. Gellner (ed.) *Soviet and Western Anthropology*, pp. 29-58. New York: Columbia University Press.

Shnirelman, V. A

1996 *Who Gets the Past? Competition for Ancestors among Non-Russian Intellectuals in Russia*. Washington D. C.: The Woodrow Wilson Center Press.

Slezskin, Y.

1991 The Fall of Soviet Ethnography, 1928-38. *Current Anthropology* 32 (4): 476-484.

Stephan, John J.

1971 *Sakhalin: A History*. Oxford: Clarendon Press.

高倉浩樹

2003 「民族文化と公共の記憶の布置——サハにおける馬乳酒祭と駒繋ぎ」瀬川昌久編『文化のディスプレイ——東北アジア諸社会における博物館、観光、そして民族文化の再編』pp. 69-

118, 仙台：東北大学東北アジア研究センター。

- 2004 「ゲルナー, アーネスト (1925-95) 編 Gellner, Ernest *Soviet and Western Anthropology*, London: Duckworth, 1980」『文化人類学文献事典』p. 72, 東京：弘文堂。

Taksami, Ch. M. (Таксами, Ч. М.)

- 2004 Проблемы у коренных малочисленных народов Севера в XX веке. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 29 (1): 181-196. Osaka: National Museum of Ethnology.

- 2005 *Культурное наследие нивхов: Этнографические коллекции нивхов в музеях Японии*. (Senri Ethnological Reports 52) Osaka: National Museum of Ethnology.

田中克彦

- 1978 『言語からみた民族と国家』東京：岩波書店。

Tishkov, V. A. (Тишков, В. А.)

- 1992 Советская этнография, преодоление кризиса, *Этнографическое обозрение* 1992 (1): 5-19.

トルストフ, S. P.

- 1959 「ソ同盟における民族誌学の成果と展望」『民族学研究』23 (1/2) : 134-142。

Tolstoy, P.

- 1952 Morgan and Soviet Anthropological Thought. *American Anthropologist*, New Series 54 (1): 8-17.

宇山智彦

- 2005 「旧ソ連ムスリム地域における『民族史』の創造」酒井啓子・白杵陽編『イスラーム地域の国家とナショナリズム』（イスラーム地域研究叢書5）pp. 55-78, 東京：東京大学出版会。

Vucinich, A.

- 1960 Soviet Ethnographic Studies of Cultural Change. *American Anthropologist* New Series 62 (5): 867-877.

Woodburn, J.

- 1980 Hunters and Gatherers Today and Reconstruction of the Past. In E. Gellner (ed.) *Soviet and Western Anthropology*, pp. 95-117. New York: Columbia University Press.

